

# The transition of an English Nursery Rhyme “Ladybird, ladybird” : A Study of the Opie Version

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏目, 康子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7357">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7357</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 英国伝承童謡 “Ladybird, ladybird” の変遷 —— オーピー版に至る過程の検証 ——

夏 目 康 子

## 1. “Ladybird, ladybird” の唄とは

英国伝承童謡マザーグースの唄の中でも、“Ladybird, ladybird”は、てんとう虫に呼びかける唄としてよく知られた唄であり、多くの大型マザーグース絵本に収録されている<sup>1</sup>。また、マザーグース研究者であるオーピー夫妻がマザーグース集成本を集めるきっかけとなったのは、二人で野原を散歩中に見つけたてんとう虫に向かってこの唄を唱えてから虫を飛ばし、この唄の意味は何だろう、何が起源なのだろうかと疑問に思ったことだったという<sup>2</sup>。この唄が文献に初めて登場するのは、最初の本格的なマザーグース集である *Tommy Thumb's Pretty Song Book* Voll.II<sup>3</sup> 『トミーサムの可愛い歌の本』第2巻 (c.1744) (以下、*TTPSB* と表記する) であり、40 篇の唄の最初にこの唄が収録されていることから、18 世紀においても主要な唄のひとつであったことが推測される。

最初にこの *TTPSB* に登場した時は “Lady Bird, Lady Bird” と始まり、挿絵では鳥の形をしたものが描かれていた (図版1)<sup>4</sup>。その後に出版された18世紀の集成本でも鳥の挿絵が描かれている (図版2)。現代ではてんとう虫の唄と考えられているが、最初は鳥の唄だった可能性がある。しかしながら、Iona & Peter Opie の



図版 1  
*Tommy Thumb's  
Pretty Song Book  
Voll. II (c. 1744)*



図版 2  
*Nancy Cock's Pretty  
Song Book (c. 1780)*

*The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* 『オックスフォード童謡事典』(初版1951, 第二版1997)(以下, *ODNR* と表記する)では, てんとう虫の唄とされている。てんとう虫に呼びかける類似の唄がイギリスのみならず, ドイツ, フランス, 北欧などにも存在することから, オーピーは, これは古い時代からあった唄であり, 悪魔除けのような意味もあったのではないかと述べている(309)。詩の長さは, 文献初出時は4行詩であったが, 現代では8行詩が標準版となっている。

本稿では, 鳥へ呼びかける版と, てんとう虫へ呼びかける版とを挿絵も参考にしながら比較検討し, また, 最初は4行詩であったものが8行詩にいたる過程を検証する。また, 文献初出は *Your children will burn* という行が, オーピーの *ODNR* では *And your children all gone* となった理由についても考察する。最終行については, オーピー版では *warming pan* だが, それが *pudding pan* である版が19世紀のハリウエルの *The Nursery Rhymes of England* から20世紀初頭にかけていくつかある。なぜ *pudding pan* という版が生まれたのか, そしてオーピーが *pudding pan* ではなく *warming pan* を標準版として採用した理由についても考察する。また, 日本で大正時代にこの唄を翻訳した北原白秋は *pudding pan* の版を底本としたために, 昭和以降の翻訳とは異なったことも指摘する。

## 2. “Lady Bird, Lady Bird” から “Ladybird, ladybird” への変遷

版による個々の詩句を検証すると, 唄のタイトルにもなり, 冒頭の語でもある *ladybird* の表記が, *Lady Bird, lady bird, lady-bird, ladybird* と複数あることがわかる。*Oxford English Dictionary* (以下, *OED* と記す)によると *ladybird* の語源ははっきりしないものの, 聖母マリアと関連づけられるという。てんとう虫の背の7つの点, マリアの7つの苦悩を象徴しているという。オーピーやベアリング＝ゲールドによると, *ladybird* は *Our Lady' bird* すなわち聖母マリアに関係がある聖なる生き物なので, 古くから殺したり, 傷つけたりすることは不吉なことと考えられてきた。そのため, 一種, 呪文のような意味も込めてこの唄をてんとう虫に向かって唱え, 吹き飛ばしたという(*Opie 309; Baring-Gould 209*)。

語義については, *OED* によると, *lady-bird* の第三義は *Any of numerous small, domed beetles of the family of Coccinellidae*, つまりテントウ虫である。

この例の初出例は 1673 年で、*TTPSB* 以前になる。*OED* では、ladybird の 1 番目に A female sweetheart という語義があり、Shakespeare の *Romeo and Juliet* の第 I 幕、第 iii 場で乳母がジュリエットに呼びかける “What Lamb: what Ladie bird.. Wher’s this girle?” というセリフが採録されている。子羊と ladybird とを並列し、無垢な可愛いものに対する愛情を込めた呼びかけとして用いられている。

*TTPSB* 版の唄が現代版と異なるのは、名詞の表記である。*Gulliver’s Travels* や *Robinson Crusoe* などでも見られることだが、18 世紀は、ドイツ語のように名詞は大文字で始まる表記が一般的だった。そのため、この 18 世紀の集成本で、Lady, Bird, Children などの名詞が大文字で始まるのも特別なことではない。

*OED* によると、lady には a female hound 「雌犬」や a female harlequin duck 「雌のシノリガモ（水鳥）」という語義もある。*TTPSB* の銅版画の挿絵を良く見ると、女の子の手に留まっているのは、てんとう虫というよりももう少し大きな、鳥の形をしたものである（図版 1 参照）。現在、この唄は「てんとう虫」の唄であると考えられており、集成本の挿絵や、絵本などでもてんとう虫として描かれることが多いが、最初に登場した時は、“Lady Bird” すなわち「雌の小鳥」に呼びかける唄だったということになる。次が初出版である。

Lady Bird, Lady Bird,  
Fly away home,  
Your house<sup>5</sup> is on fire,  
Your Children will burn. (*TTPSB* 5) (下線筆者)

以上のように、文献初出は 4 行詩だった。それが時を経るにつれ、行数が増え、現在の 8 行になったことになる。標準版として参照されるオーピー夫妻の *ODNR* では次のようになる。

Ladybird, ladybird,  
Fly away home,  
Your house is on fire

And your children all gone;

All except one

And that's little Ann

And she has crept under

The warming pan.

(ODNR 308) (下線筆者)

この2つを比較すると、鳥への呼びかけ唄から、てんとう虫への呼びかけ唄に変わり、最初は4行詩であったものが8行詩になったことがわかる。火事になった家で *TTPSB* では *Your Children will burn* だが、*ODNR* では *And your children all gone* 「子どもたちは皆いなくなってしまった」という違いがある。また、オーピー版では最終行が *warming pan* だが、19世紀には *pudding pan* である版がいくつかある。本稿ではこの最終行の変遷にも着目する。

次に挙げる *Nancy Cock's Pretty Song Book* (c. 1780) でも、挿絵は鳥である (図版2)。Lady-Bird とハイフンが入り、Bird も大文字になり、4行目が *TTPSB* と異なり、*Your children are gone* である。オーピーは結果的にこの *Your children all gone* を採用したことになる。*TTPSB* の *Your Children will burn* よりも残酷でなく、かつ *gone* には「立ち去る」と「死ぬ」の二つの意味があるので、解釈の余地が広がる。マザーグースの “*There was an old woman/ Lived under a hill,/ And if she's not gone/ She lives there still*” (下線筆者) の唄にも *if she's not gone* という詩句があるが、これと同様、*gone* には2重の意味を読み込むことが可能になる。

Lady-Bird, Lady-Bird.

Fly your way home,

Your house is on fire,

Your children are gone. (下線筆者)

次に、*Gammer Gurton's Garland* (1784) (以下、*GGG* と表記する) を検証する。冒頭の呼びかけはハイフン入りの *Lady-bird* となり、4行詩である。この唄に挿絵はない。

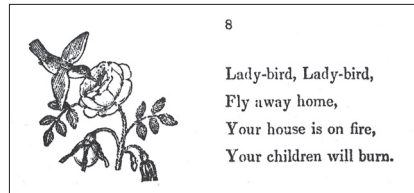
Lady-bird, lady-bird,  
Fly away home;  
Your house is on fire,  
Your children will burn.

ここでは Lady-bird とハイフンで繋がられているが、*OED* では lady-bird は昆虫の語義もあるので、「雌の小鳥」とも「てんとう虫」ともとることができる。*GGG* には挿絵がないのでどちらを指すのかははっきりしない。この版では、lady-bird とハイフンが入ったことと、名詞の大文字表記が小文字表記になったことを除けば、初出文献の *TTPSB* と同じである。

### 3. 19 世紀の集成本

19 世紀にアメリカで出版された *Mother Goose's Melodies: The Only Pure Edition* (1833) は次のようになる。挿絵ではバラの花の蜜を吸おうとする小さな鳥を描いている (図版 3)。

Lady-bird, Lady-bird,  
Fly away home,  
Your house is on fire,  
Your children will burn.



図版 3  
*Mother Goose's Melodies: The Only Pure Edition*(1833)

Lady-bird とハイフンがあり、挿絵によると、鳥として解釈されている。house にロングエスは使われていない。詩句から、本書は初出文献の *TTPSB* を参照したことがわかる。

Opie の *ODNR* によると、後半の 4 行が加わり 8 行詩になるのは、Banbury の J. G. Rusher が印刷・出版したチャップブックの一つ *Poetic Trifles, for Young Gentlemen & Ladies* (c. 1840) である。普通、チャップブックは挿絵が豊富だが、残念ながらこの唄に挿絵はついていない。

Lady-bird, lady-bird,  
Fly away home,

Your house is on fire,  
 Your children at home:  
 They're all burnt but one,  
 And that's little Ann;  
 And she has crept under  
 The warming-pan. (下線筆者)

挿絵がないため、Lady-bird は鳥なのかてんとう虫なのかはっきりしない。これが初めて 8 行詩となった版である。Ann という子どもが登場し火事の中で生き残るが、Ann が火事を避けるために下に潜り込むものが warming-pan である。warming pan とは、熱した石炭をふたつきのフライパンのような金属製の入れ物に入れて、冬季に寝具を温める器具である。日本に置き換えるなら、アンカや湯たんぼのようなものになる。

この warming pan に関連して、17 世紀にイギリスの人々の大きな関心を引いた出来事があった。イギリス王室に絡んだ Warming Pan Plot と呼ばれる事件である<sup>6</sup>。カトリック教徒のジェームズ 2 世の 2 番目の妻メアリ・オブ・モデナが妊娠し、プロテスタントの反ジェームズ派が恐れていた王子誕生が 1688 年 6 月に公になった。男児誕生であれば最初の王妃アン・ハイドの王女でプロテスタントであるメアリやアンへの王位継承の望みが閉ざされる。反ジェームズ・反カトリックの人々の間では、王妃は女兒を分娩したのに、万が一のことを考えて準備していた男児を warming pan の中に入れて王妃の床へ運び、すり替えたという噂がささやかれた。果たして新生児が気づかれることもなく warming pan の中に入れて王妃の出産の場に運び込むことができるのかは疑問だが、warming pan が想像力を掻き立てる語であったことは確かである。Oxford English Dictionary でも、warming pan の 2 番目の語義に、Historical とあり、ジェームズ 2 世の息子で後に大僭称者と呼ばれることになった男児が王妃の床に warming pan で運ばれたとする話への言及として、1689 年の用例を載せている。このように、17 世紀後半から、warming pan は含意のある語であった。

しかし、19 世紀半ばから、J. O. Halliwell などいくつかの版ではこの最終行の warming pan が pudding pan に替えられている。warming pan に比べて、pudding pan というものは一般的な語ではない。pudding を作るため

の型である pudding mold なら日常的にあるものだが、pudding を作る専用の鍋というものは一般的でない。OED には warming pan の項目では用例が 1590 年頃から 1883 年まで 10 数例と豊富だが、pudding pan は 1592 年から 1989 年までわずか 5 つの用例しかない。ちなみに、現代使用されている *Oxford Dictionary of English*, *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, *Longman Dictionary of Contemporary English 6<sup>th</sup> Edition*, 『研究社新英和大辞典』, 『ジーニアス英和大辞典』などの辞典で、warming pan の項目は存在するが、pudding pan はどの辞典にも項目がない。そのような一般的ではない語を、なぜあえていくつかの版で最終行に採用したのだろうか。この語を採用したハリウエルの版を検証しよう。

シェイクスピア学者である James Orchard Halliwell は、マザーグースの集成本を作ることを思い立ち、1842 年に 300 篇の唄を集めて *The Nursery Rhymes of England* を編纂したが、その後、唄を増やし、何度も版を重ねた。“Lady-bird”の唄は、最初は短い 4 行詩を収録したが、長い版を収録するようになると、最終行に pudding pan を採用した。初版本 (1842) では、Index では 1 行目が Lady-bird, lady bird, fly thy way home 158 ページと表記があるが、本文の 158 ページを見ると “LADY-cow, lady-cow, fly thy way home” の唄が収録されており、Index と本文の不一致が見られる。1843 年の第二版では改善され、2 つの唄が同じページに載っている。“Lady-bird! Lady-bird!” と始まる短い 4 行詩である。なぜか 1844 年版では “Lady-bird!” の唄は削除され、収録されていない。1853 年の第 5 版をもとにした 1886 年版では “Lady-cow, lady-cow” の唄と、“Lady bird, lady bird, fly away home” の 2 つの唄が収録されている。次が長い版の “LADY bird” の唄である。

LADY bird, lady bird, fly away home,  
Thy home is on fire, thy children all gone,  
 All but one, and her name is Ann,  
 And she crept under the pudding-pan. (下線筆者)

4 行詩だが、1 行が長くなり、ハリウエルは *Poetic Trifles* で使われていた your ではなく、thy という古風な語を使用し、最後は warming pan ではなく、pudding pan としている。pudding pan を採用した理由は音のためだろ



う。p の音が *pudding* と *pan* の最初にあるので頭韻を踏んでおり、*warming pan* よりも語調が良い。マザーグースは韻文であるので、音は重要なポイントの一つである。例えば、“*Georgie Porgie, pudding and pie*” と始まるマザーグースの唄は、最初の2語 *Georgie Porgie* で脚韻を踏み、次に、*Porgie, pudding, pie* で頭韻を踏み、1行の中に脚韻と頭韻が同居していることになり、*Porgie* がその橋渡しとなっており語調が良い。意味よりも音を重視するマザーグースならではの語の組み合わせである。早口言葉では、p の音を重ねる “*Peter Piper picked a peck of pickled pepper*” のような唄もある。他にも、有名な唄で言うと、“*Old Mother Hubbard*” では *bread* と *dead, red* と *head, coat* と *goat* など押韻のために語が使われ、奇想天外な展開、ナンセンスな展開を生み出している。マザーグースは韻文であるから、音や韻が重要な要素になる。そのためにハリウエル版では *warming pan* よりも音として面白く、頭韻を踏むので語調が良い *pudding pan* が採用されたのだろう。

一方、*Nursery Rhymes Tales and Jingles* 2<sup>nd</sup> edition (1846) では、次のようになる。

LADY-BIRD, lady-bird, fly away home,  
Your house is on fire, your children at home;  
They're all burnt but one, and that's little Ann,  
And she has crept under the warming-pan. (下線筆者)

次に挙げるアンドルー・ラングが編纂した *The Nursery Rhyme Book* (1898) の版は、ハリウエルと同様である。

LADY bird, lady bird, fly away home;  
Thy house is on fire, thy children all gone—  
All but one, and her name is Ann,  
And she crept under the pudding-pan. (下線筆者)

これは “*Lady bird, lady bird, fly away home*” というハイフン無しで2語の *Lady bird* だが、*pudding-pan* で終わる。レズリー・ブルックによる挿絵は、野原で手の甲に留まった虫を見つめる少女の絵である。挿絵を描いたブ

ルックは、“Lady bird”を「てんとう虫」と解釈している。アーサー・ラッカムの *Mother Goose* (1913) も、同様に、最終行は pudding pan の版で、挿絵は少女が野原で手の甲にてんとう虫をのせている場面である (図版4)。このように、19世紀後半や20世紀初頭には、ハリウエルの pudding-pan の版と、Rusher から始まる warming-pan の版の二つが存在していた。1951年にオーピー夫妻の *ODNR* が出版されると、20世紀半ば以降はオーピー版を標準版として採用する本が多くなり、8行詩で、最後は warming pan で締めくくるものがほとんどである。次章ではこの唄の挿絵を検討する。



LADY bird, lady bird, fly away home ;  
 Your house is on fire, your children are gone—  
 All but one and her name is Ann,  
 And she crept under the pudding-pan.

#### 図版 4

Arthur Rackham illus. *Mother Goose: The Old Nursery Rhymes* (1913)

#### 4. Ladybird の挿絵の変遷

夏目・藤野『マザーグースイラストレーション事典』(2008)などを参考に、この唄の挿絵の変遷をみよう。鳥の絵の *TTPSB* の次に注目されるのは、*Nancy Cock's Pretty Song Book* (c.1780) である。表記は“Lady-Bird”，挿絵は第2章で述べたように鳥の絵である (図版2)。*Mother Goose's Melodies: The Only Pure Edition* (1833) では表記は“Lady-bird”，絵はバラの花の蜜を吸いにやってきた小鳥の絵である (図版3)。アメリカで出版された *Mother Goose's Melodies Selected and Arranged by My Uncle Solomon* (1850) では、表記はアメリカらしく“Lady-bug”である。絵は、燃え盛る家と逃げ惑う人々を描いた火事の場面である。鳥でもなく、てんとう虫でもない絵は珍しい。

20世紀になると、この唄の挿絵にはてんとう虫が描かれることが多くなる。Charles Robinson による *The Big Book of Nursery Rhymes* (1903) では、少女が手の甲にてんとう虫をのせている。Gabriel Pippet による *Old Rhymes with New Tunes* (1912) では、少女が左手の甲にてんとう虫をのせ、右手の

人差し指を立てて、てんとう虫に語りかけている。Frederick Richardson の *Mother Goose* (1915) では、少女がてんとう虫を飛ばしている場面が描かれている。Blanche Fisher Wright の *The Real Mother Goose* (1916) では、少年の手の甲にてんとう虫をのせている場面、Ernest Nister の *Mother Goose* (1922) では少女が右手の手の甲にのせててんとう虫を飛ばそうとしている場面が描かれる。

20 世紀の絵本では、ほとんどがてんとう虫を描いており、鳥の絵は見当たらない。まとめると、18 世紀の挿絵では鳥が描かれていたが、19 世紀以降はてんとう虫として描くものが増える。野原や海岸などの自然の中で少年少女がてんとう虫と交流する姿が描かれることが多い。日本とは異なり、図版 4 のように、てんとう虫を手の甲にのせるのが英語圏では主流のようだ。

## 5. 日本での受容——北原白秋はどう訳したか

マザーグースには明治時代から数多くの翻訳があるが、この唄は、日本では約 100 年前から翻訳されている。北原白秋は大正 9 年 (1920) に『赤い鳥』の 1 月号から 5 月号に 14 篇のマザーグースの翻訳を載せ、その中に「てんたう蟲」も含まれていた。次の年、1921 年に 131 篇を収録した『まごあ・ぐうす』をアルスから出版した。白秋は何度も改訂を重ね、訳語に修正を施している。角川文庫版『まごあ・ぐうす』の平野敬一の「あとがき」によると、白秋が翻訳の際に底本にしたのは、Margaret W. Tarrant の絵がついた *Nursery Rhymes* 4th ed. (初版 1914) や Mabel Lucie Attwell の絵がついた *Mother Goose Nursery Rhymes* (n.d) などである。白秋は、大正 13 年 (1924) の『まごあ・ぐうす』では次のように訳している。

てんたう蟲， てんたう蟲，  
 早う家へ歸れ，  
 お前の家や火事だ。  
 みんな子供は焼け死んだ。  
 娘つ子のアンヌがたつたひとり，  
 プッチングの鍋の下に  
 つんぐりむんぐり潜ぐつた。 (『まごあ・ぐうす』大正 13 年)

白秋が元にした *Nursery Rhymes* の版は, “LADY bird, lady bird, fly away home,/ Your house is on fire, your children all gone;/ All but one, and her name is Ann,/ And she crept under the pudding pan.”である。pudding-pan 版なので, Ann が潜ったのは「プッチングの鍋」と訳されているが, 昭和後期以降は, 1951 年に出版されたオーピー版を底本とすることが多いので, 「アンカ」「行火」「こたつ」などと訳されることが多い。本稿では和訳については白秋のみを検討し, 白秋以降の昭和・平成時代の翻訳作品の検討は, 別稿に譲る。

## 6. “Ladybird, ladybird” の唄のまとめ

18 世紀に鳥の挿絵とともに登場した “Lady Bird” 「雌の鳥」の唄は, 18 世紀には鳥の挿絵が描かれ, 19 世紀初頭も “Lady Bird” で維持されていたが, 19 世紀半ばから lady-bird の版が登場し, 20 世紀には表記は lady-bird や ladybird が主流となり, 現代では「てんとう虫」の唄と解釈されるのが一般的になっている。また, 1840 年頃に, 最初は 4 行詩であったものに後半の 4 行が加わり, この 8 行版が現代まで引き継がれることになった。その後半部分の最終行が, 当初は warming pan であったものが 19 世紀半ばのハリウェルの選集に, 頭韻を踏み, 語調が良い pudding pan という版が採録され, その pudding pan 版が大正時代や昭和初期に, 日本の翻訳の底本として使われた。

オーピー夫妻は *ODNR* を編纂する際, 冒頭は Ladybird としたが, 4 行目は, 文献初出の子どもたちが燃える burn ではなく, 「立ち去る」と「死ぬ」の 2 つの意味にとれる gone を採用した。詩としては, 残酷な burn よりも二つの意味を持つ goneの方が解釈の幅が広がる。また, オーピー版では最終行は, 初めて 8 行詩となった *Poetic Trifle* を踏襲し, ハリウェルらの pudding pan ではなく warming pan を採用した。pudding pan 版を底本とした北原白秋の翻訳では「プッチング鍋」と訳されたが, 昭和後期からは warming pan 版を底本とするものが増え, 訳語として「アンカ」「こたつ」などと訳される。そもそも pudding pan は現代の辞書では項目が無い語であり, *OED* でも用例が極端に少ない。暖房が発達していなかった時代, イギリスの日常生活の中で見かけるものは pudding pan ではなく warming pan だったから, オーピーが文献初出を踏襲して, warming pan を採用したのは理解できる。

以上のように、口承文芸でありほとんどが作者不詳であるマザーグースの唄には、長い歳月の中で、さまざまな版が生まれ、詩句が変わってしまうことがわかる。この唄の場合は、*ladybird* は冒頭の語であり、また、タイトルにもなるようなキーワードであるが、2語に分かれたり、ハイフンで繋いだり、いろいろな形があった。また、子どもたちについて *Children will burn* という版と *Your children all gone* の版があるが、オーピーは二つの解釈が可能な *gone* を採用した。そして最終行では、*warming pan* ではなく頭韻を踏む *pudding pan* という、ほとんど用例の無い語が19世紀半ばからいくつかの集成本で使われ、日本の翻訳の底本となっていたことも判明した。

これらの事例からわかることは、作者不詳の伝承文学なので許容されることではあるものの、時代の中で自由に変遷するマザーグースの唄について、原点に帰って文献初出の形を知り、変遷を検証する必要があるということである。現代ではオーピー版を標準版として採用する集成本・絵本がほとんどだが、オーピーの *ODNR* 初版出版年の1951年から70年以上が経った現時点で、それぞれの唄でオーピー版がなぜその版を採用するに至ったかを検証することにより、実は、一つの唄に色々な側面があったことが浮かび上がってくる。あまり使われない語、見慣れない語でも、音として面白く、韻律が心地よいならば許容されてしまうところが、マザーグースの懐の深さである。結局のところ、選集を漁れば漁るほど、マザーグースにはオーピー版に限らずいろいろな版があることを痛感し、その奥行きを再認識させられる。

## 注

1. 1993年に、イギリスで、実際にマザーグースの唄がどれだけ知られているか調査を行った楠本君恵によると、17冊の絵本のうち10冊にこの唄は収録されていた(楠本209)。
2. Iona Opieの伝記に次のようなエピソードがある。“It was when we were walking along the path beside a nearly ripe field of corn that our future was decided by a ladybird. Idly one of us picked it up...and said to it: “Ladybird, ladybird, fly away home...” The ladybird obeyed...and we were left wondering about this rhyme...What did it mean? Where did it come from? Who wrote it?” (Opie 1988: 208)
3. *Tommy Thumb's Pretty Song Book* Voll. II は最初の本格的なマザーグース集成本だが、現存するのは2冊だけであり、大英図書館とアメリカのプリンストン

ン大学コウツェン児童図書館が所蔵している。この2冊を元にして2013年にCotsen Occasional Pressからファクシミリ版が出た。

4. チャップブックでは、1ページに挿絵と唄が載っているのが一般的である。
5. 原文では、houseのsはロング・エス。
6. この“Ladybird, ladybird”の唄とwarming panの関連、およびイギリス王室史に関わるWarming Pan Plotから名誉革命、そして大僭称者の息子小僭称者がスコットランドに上陸しカロドン・ムアの戦いで敗れるまでの流れについては、拙著『不思議の国のマザー・グース』第III章の3「動物・鳥・昆虫たちのマザー・グース」の項を参照。

(付記) 本稿を書くうえで、マザー・グース学会の藤野紀男氏と高屋一成氏に資料や情報についてご協力いただいたことに対して感謝の念を捧げたい。

### 参考文献・引用文献

- 北原白秋訳、平野敬一解説『まごあ・ぐうす』角川文庫、1976。
- 楠本君恵『まごあ・ぐうす マザー・グース』未知谷、2010。
- 高屋一成編『マザー・グース初期邦訳本復刻集成』第1巻、エディション・シナプス、2011。
- 夏目康子『マザー・グースと絵本の世界』岩崎美術社、1999。
- \_\_\_\_\_。『不思議の国のマザー・グース』柏書房、2003。
- \_\_\_\_\_。「マザー・グース“Hey Diddle Diddle”はどう翻訳されてきたか——北原白秋から機械翻訳まで」『マザー・グース研究XIV』マザー・グース学会、2022。
- 夏目康子・藤野紀男『マザー・グースイラストレーション事典』柊風舎、2008。
- 藤野紀男・夏目康子『マザー・グース・コレクション100』ミネルヴァ書房、2004。
- Baring-Gould, William S. & Ceil. *The Annotated Mother Goose*. New York: Bramhall House, 1962.
- Gammer Gurton's Garland*. London: R. Triphook, 1810.
- Gammer Gurton's Garland*. Glasgow: Hugh Hopkins, 1866.
- Halliwell, James Orchard ed. *The Nursery Rhymes of England*. London: The Percy Society, 1842.
- \_\_\_\_\_。 *The Nursery Rhymes of England* 2<sup>nd</sup> ed. London: John Russell Smith, 1843.
- \_\_\_\_\_。 *The Nursery Rhymes of England* 5<sup>th</sup> ed. London: Frederick Warne, 1886.
- \_\_\_\_\_。 *The Nursery Rhymes of England*. London: The Bodley Head, 1970.
- \_\_\_\_\_。 *Popular Rhymes & Nursery Tales of England*. London: The Bodley Head, 1970.
- Immel, Andrea and Brian Alderson. *Nurse Lovechild's Legacy*. Los Angeles: Cotsen

- Occasional Press, 2013.
- Jerrold, Walter ed. Charles Robinson illus. *The Big Book of Nursery Rhymes*. London: Blackie & Sons, 1903.
- Lang, Andrew ed. L. Leslie Brooke illus. *The Nursery Rhyme Book*. London: Frederick Warne, 1898.
- Nancy Cock's Pretty Song Book*. c. 1780. Microfilm of the Bodleian Library.
- Nursery Rhymes Tales and Jingles* 2<sup>nd</sup> ed. London: James Burns, 1846.
- Mother Goose's Melodies: The Only Pure Edition*. Boston: Munroe & Francis, 1833.
- Opie, Iona & Peter. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. Oxford University Press, 1951, 1997.
- Opie, Iona. "Iona Opie 1923", J. Nakamura ed. *Something about the Author: Autobiography Series* vol.6. Detroit: Gale Research, 1988.
- Oxford English Dictionary*, Online 版 <<https://www-oed-com.otsuma-u.idm.oclc.org>> 2022, 3.
- Poetic Trifles*. Banbury: J. G. Rusher, c.1840.
- Rackham, Arthur illus. *Mother Goose: The Old Nursery Rhymes*. London: Heinemann, 1913.
- Tarrant, Margaret W. illus. *Nursery Rhymes* 2<sup>nd</sup> ed. London: Ward, Lock & Co., Ltd., 1916.
- Tommy Thumb's Pretty Song Book* Voll. II. London: Mary Cooper, c. 1744. Facsimile ed. by Cotson Occasional Press.

### <図版>

- 図版 1 *Tommy Thumb's Pretty Song Book* Voll. II (c. 1744)
- 図版 2 *Nancy Cock's Pretty Song Book* (c. 1780)
- 図版 3 *Mother Goose's Melodies: The Only Pure Edition*(1833)
- 図版 4 Rackham, Arthur illus. *Mother Goose: The Old Nursery Rhymes*(1913)